

国土マネジメントと江戸

関東平野の開発と江戸



近世の経済は「米遣いの経済」と言われているように、米が経済の基軸であった。この米作の中心地域が沖積低地であった。この沖積低地の大きさについて国土交通省作成の想定最大氾濫面積を指標にして整理した。

利根川の沖積低地が跳び抜けて大きいことが分かる。信濃川の約2.6倍になっている。流域の大きさでも利根川が最も大きいことは変わらないが、第2位の石狩川に比べてわずか1.2倍にしかすぎない。

なお以前、支川であった荒川を含めた沖積低地は5,500km²で、他の水系をはるかに凌駕している。第2位の大きさの新潟平野（信濃川と阿賀野川をあわせる）の約2倍となっている。水田開発からみたそのポテンシャルは、極めて大きかった。

我が国河川の沖積低地（想定最大氾濫面積）と流域面積

【主な河川の想定最大氾濫面積】			【主な河川の流域面積】		
順位	河川名	想定最大氾濫面積	河川名	流域面積	備考
1	利根川	5,102.4	利根川	16,840	
2	信濃川	1,937.1	石狩川	14,330	
3	石狩川	1,920.2	信濃川	11,900	
4			北上川	10,150	
5			十勝川	8,400	木曾川 9,100
6	北上川	1,147.1	阿賀野川	7,710	
7	荒川	1,028.2	最上川	7,040	
8	阿武隈川	981.7	天塩川	5,590	
9	十勝川	938.1	阿武隈川	5,400	
10	阿賀野川	921.9			信濃川 154.8
11	天塩川	692.0			
12	最上川	668.3			
13	雄物川	685.3			
14			筑後川	560.3	
15			高梁川	531.8	
16	岩木川	496.4			
17	富士川	448.5			
18	釧路川	432.0			
19			大和川	418.5	淀川 80.0
20			九頭竜川	405.1	
21			庄内川	392.1	木曾川 142.3
22			加古川	331.4	
23	那珂川	294.6			
利根川+荒川		5,554.7			
信濃川+阿賀野川		2,704.2			
木曾川+庄内川		1,961.3			
淀川+大和川		1,853.1			
北上川+阿武隈川		1,198.6			

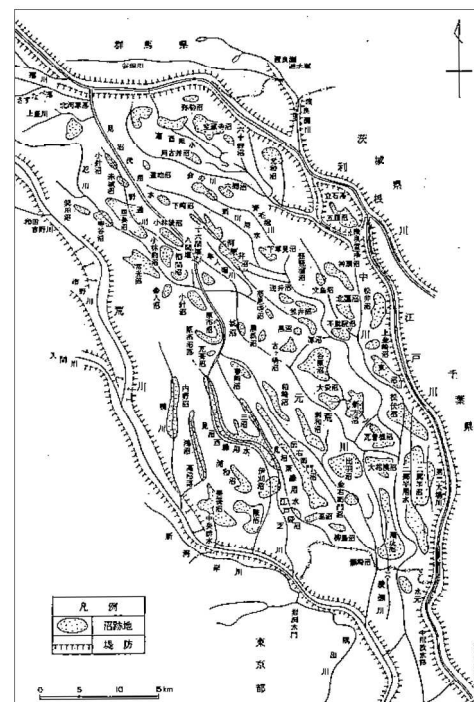
順位	河川名	流域面積	河川名	流域面積
1	利根川	16,840		
2	石狩川	14,330		
3	信濃川	11,900		
4	北上川	10,150		
5			木曾川	9,100
6	十勝川	8,400	淀川	8,250
7	阿賀野川	7,710		
8	最上川	7,040		
9	天塩川	5,590		
10	阿武隈川	5,400		
11			天竜川	5,090
12				
13	雄物川	4,709		
14	朱代川	4,100		
15	富士川	3,990		
16			江川	3,870
17			吉野川	3,750
18	那珂川	3,270		
19	荒川	2,940		
20			九頭竜川	2,930
21			筑後川	2,860
22			神通川	2,720
23			高梁川	2,670
24	岩木川	2,540		
25			新宮川	2,360
26			新湊川	2,270
27			大淀川	2,230

単位 (km²)

江戸は、この利根川水系をヒンターランドとして成立した。江戸では関東の諸河川を「奥川」と呼び、これらの河川から荷物を積んで江戸に集まる舟を「奥川船」と呼んでいた。その積極的な開発は戦国時代の後北条家の時代から始まっていたが、近世になって本格化した。埼玉平野の代表的な農業用水は葛西用水と見沼代用水であり、利根川本川から導水した。それらの成立は前者が享保4年（1719）、後者が享保13年（1728）である。見沼代用水は、見沼溜井を開拓する代わりにの用水であったが、見沼以外でも大小の湖沼が開発され、約2000町歩の新田が得られた。



利根川荒川玉川水利之図(部分) (東北大学附属図書館蔵) 一近世後期の河川状況を表している。



中川流域池沼跡地略図(小野久彦原図より) (「見沼代用水土地改良区史」見沼代用水土地改良区 1988から転載)